

女子美

No.165/2010

- 2P 北川フラム教授 インタビュー
- 4P 大地の芸術祭「批評家の海岸」トーク
- 7P 客員教授マール・セルベット氏 特別講義報告
- 8P 旧工場でファッション&パフォーマンスショー 他
- 9P アート・デザイン表現学科イベント報告
- 11P ウィーン応用芸術大学と学術交流協定締結 他
- 12P 東京デザイナーズウィーク2009に参加 他
- 13P 100周年記念大村文子基金
- 14P 女子美祭報告
- 16P 客員教授 仲條正義氏特別講義報告 他
- 17P シビル・ハイネン氏特別公開講座報告 他
- 18P 海外サマー・スクール報告
- 19P 女子美アートミュージアム展覧会情報
- 20P 公募展受賞者紹介、卒業・修了制作展ご案内

女子美術大学広報誌

特集 大地の芸術祭を終えて① 北川フラム教授インタビュー



これまで数多くの展覧会やアートプロジェクトを手がけてきている芸術学科の北川フラム教授。日本各地の芸術祭（アートフェスティバル）のディレクターとして、アーティストと地域の行政や市民、協力団体の人々をつなげる中核的な役割を担ってきました。2009年には「水都大阪2009」「第4回大地の芸術祭—越後妻有アートトリエンナーレ」「日本海政令市にいがた 水と土の芸術祭2009」の運営に携わり、人と社会にとってアートが持っている重要な可能性を実感されたと言います。2010年は、夏に開催される「瀬戸内国際芸術祭2010」の総合ディレクターを務めるためもっか準備中です。今回は芸術祭の背景とともに、現代社会におけるアートの必要性などについてお話を伺いました。

人と違ってほめられるのは美術というジャンルだけ

去年は、大阪、越後妻有、新潟市で大きな芸術祭が開催されました。それぞれ準備の段階ではいろいろと苦労もありましたが、蓋を開けてみると、訪ねて来てくれたお客さんや裏方で頑張ってくれた人たちにも喜んでもらったのが嬉しかったですね。特に、第4回目を迎えた越後妻有の大地の芸術祭は、これまで参加してくれた学生たちや地域の人たちだけでなく、都会から多くの大人が参加して力になってくれました。この点、大きな流れが変わってきたなという実感があります。その背景には、都市の人間たちが自分の新しい故郷をつくらうとしているというすさまじい動きが感じられます。都市にいと人間は単なる労働力A、B、Cになってしまう。学生も会社員も取り替えがきく存在になりつつある。その人でなければできない仕事というものはほとんどあ

りません。また、そうでなければ都市は機能しないのです。受験で苦労し、入社で苦労した人たちがいる日突然会社が買収されて失業する世の中、自分が一個人として扱われる世界を求めだしているのではないのでしょうか。これもグローバル化の一つの現れなのだと思います。ものすごく大きな話のようですが、世代とかジャンルとか地域を超えてあるわけで、そこに美術というのが今求められているのだと思います。

私が思うのは、美術だけが速いとか正しいとか、モデルに合っているとかわれなくていいジャンルなのということ。おそらく、いろいろな分野やジャンルの中でも、人と違ってほめられるのは美術だけでしょう。プロ野球選手のイチローですら正しいバッティングフォームでないとと言われて1年を棒に振ったこともあるくらいです。スポーツの世界がそうであってはまずいと思いますが、美術だけはまだ人と違って喜ばれる。これは重要なことです。

美術の根底に、人と人はみんな違うという考えがあります。美術が好きなのは、まず小学校2、3年の頃に出てくる分数で算数が嫌いになるでしょう。私に言わせると嫌いになるほうが当たり前。例えば、青い大きなリンゴ4分の3と小さな赤いリンゴ4分の3を足すなんてこと、わからなくなるのが当然です。青と赤は違うし、大きいのと小さいのをどう足すか。その具体性の前で抽象化できない人間たちがみんな数学嫌いになるんです。私はそれが真っ当だと思います。美術というのはそういう連中たちをも許容できる分野です。美術は彫刻と絵画だけでなく、食べ物からお祭りとかサーカスマで、いろいろなものを全部含むものです。そういう広い意味で美術が1人ひとりの人間の存在に対して持っている可能性が、今浮き彫りになってきているように思います。



第4回 大地の芸術祭
田島 征三「鉢&田島征三・絵本と木の実の美術館」
photo: Takenori Miyamoto + Hiromi Seno

アートが出会いや行動のきっかけをつくっている

越後妻有大地の芸術祭秋版を終えて、最終日の打ち上げに参加しました。日曜日の夜8時から参加しましたが、そこに100人以上の人たちが泊まりがけで来てくれました。そこで、この地域の農業とか大地の芸術祭をどうしたらいいかを真剣に議論するわけですが、参加者は学生だけでなく、東京とか首都圏在住の大人たちが圧倒的に多かった。その人たちが、土日月の3連休にやってきて、ガイドをはじめ、留守番や撤収作業の手伝いをしてくれたのです。実際、そういう人たちがすごく増えている。

会社に勤めていると、自分の地域では夜、寝に帰るだけみたいなことになっています。特にニュータウンなどは完全にそういう状態で、多くの人たちは自分の居場所がないように感じているのではないのでしょうか。会社と言ってもこのご時勢では、いつ自分はいらないと言われるかもわからない。そういう中で、自分が持っているエネルギーを発揮する場所、人の役に立てる場所を求めている人が本当に増えているのだと思います。そのひとつの受け入れ場所として田舎があるのだと思います。子どもたちや地域の人が都会に出て行ってしまった過疎の地では、少しのお手伝いでも本当に感謝されます。だから妻有の大地の芸術祭では、どんどん大人たちが熱心になって、たくさん協力してくれるようになりました。これはすごいことだと思います。

芸術祭はひとつのお祭りで終わりがあります。でもそこで過疎の現実を見た都市の人間が、考えることを始め、行動することを始める。自分の居場所やなすべきことを探すきっかけになっている。アートが出会いや行動のきっかけをつくる媒体になっているのです。

私は今の正しい、速い、効率がいいとい



日本海政令市「にいがた 水と土の芸術祭2009
王 文志「Water Front—在水一方」

photo: Osamu Nakamura

う世界から除外されている人間たちが、ものすごく大きな潜在能力を持っていて、その人間たちが今壊れはじめている厳しい社会を救うであろうと思っているのです。そういう人たちが、自分の感性や能力に気づき、力を発揮する場をつくりだすことが、これから最も重要になるでしょう。そこでアートは空間と人間をつなぐ役割を担うことができる。私は、こういう意味でのアートプロデュースとかマネジメントをしっかりとやれる勉強の場をつくっていかねばならないと考えています。美術大学は、その受け皿になっていったほうがいいと思っています。女子美には大きな可能性があります。学生たちが、さまざまなジャンルに行ってくれるとありがたいと思っています。いろいろなことを一生懸命やればいいんだ、ということをして女子美の授業でやっていきたいと思っています。

アートと関わっているとき、みんなとても熱心になれる

外から見ると、いろいろなアートフェスティバルを私がやりたいと言い出して、軍団を率いてやっているように見えるかもしれませんが、それぞれの地域でみんなが自主的にやっているのが実情です。私の役割はみんなの活動を支援することなのです。

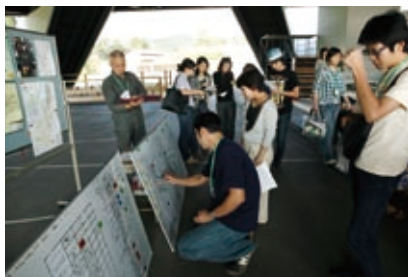
「水都大阪2009」は、大阪の財界が府と市に呼びかけて、大阪の地盤沈下がひどいから、なんとか元気になるようなきっかけをつくろうということで、私にも声がかかりプロデューサーとして参加しました。その後、コスト削減を使命とした市政のほうから待ったの声がかかり再検討となりましたが、財界の支持を得て実現しました。「水辺を楽しむ100の方法」というテーマのもと160組のアーティストたちが登場し、大阪の中の島にとっても柔らかな癒される風景をつくりだしました。そこには、母親が子どもたちと来たり、あるいはサラリーマンが仕事を終えて夕方に集まるというふうに、実際200万人の人が訪れて大いに盛り上がりました。結果的に市政からも喜んでいただいたのがよかったです。アートが人々



水都大阪2009 文化座遠景 ©水都大阪2009

を豊かな気持ちにしてくれる、ということが伝わったのではないかと考えています。今回の場合、私の役割はイベントの存続が危ぶまれたときに、美術を表に出さずにこういう仕組みでやっていくという方針を変えたりする場面を担当しました。もちろん反対もありますが、そこは私がしっかり踏ん張らないといけない。ここぞというポイントを押さえるのがプロデューサーやディレクターの役割で、あとは現場のみんなの努力があるからできるのです。

いろいろなトラブルも含めて、どうしてこの仕事を続けているかと聞かれれば、やっぱり美術は本当に面白いと思っているからです。作品をつくっているアーティストも芸術祭を準備している人たちも、アートに関わっているときは、みんなとても熱心になれる。そういう気持ちになれるチャンスが芸術祭の現場にはあるわけです。そういうことをリアルに味わってもらえるチャンスを学生たちにも増やしたいと思っているのですが、なかなか難しいですね。



大地の芸術祭で動くスタッフたち
photo:Kang Chulgyu

「人」が間に入らないと伝わっていかない

もともと美術というのは、お祭りや大道芸、床の間、庭、食べ物とか全部含めているいろいろな技の全体が美術だったにもかかわらず、明治時代のはじめから彫刻、絵画、工芸というのが美術の主流となりました。技が非常に狭くなり、ファインアートというものが美術館や学校の中だけのものになってしまいました。

20世紀の終わりから地球環境も危ないし、社会の仕組みも崩壊している。そういう状況のときに、どのあたりに未来への可能性があるかという、もう一度生活とか、そういう手触り感みたいなものとか、肉体的な五感と関わるものが重要なのではないだろうかと思っています。そのときに、私は美術がもっている射程というのが非常に広いだろうと思っているのです。

今の時代、我々の社会は情報と記号だけになりつつあります。メールもインターネットも携帯も記号に追われて生きている。



2010年夏には「瀬戸内国際芸術祭2010」が開催される

でももっとフェイストゥフェイスで人といることの中で、見えていくものが大きいと思うのです。私は美術をそういう視点からやりたいなと思っています。美術の中で「人」は重要な意味を持ちます。それは「もの」とか「場所」と「人」をつなぐものは、本当に「人」が間に入らないと伝わっていかないからです。

私が今の仕事をやっているのは、目の前にあるものをひとつずつやった結果です。今の人たちは、将来何になりたいと青い鳥を探しすぎているように感じています。マニュアル通りにやらないといけなくなってきて、そういうふうにしたがる。考えてものをするのをしなくなった。それをもう一度自分で考えながらしてほしいと思います。それにはいろんな意味で違う場所に行つて何かと出会うことが大切です。可愛い子には旅をさせよと言ったでしょう。今は旅もパッケージで既成化され、自分で判断して行動する旅がなくなってきています。そういう意味で自ら出会いというものをつくっていくが必要になっています。その出会いのときに、美術がいいんですね。つまり、こうすれば儲かるということだったら、みんな私利私欲だけでつながる。つながらない時はつながらない。でも美術っていわば赤ん坊みたいなもので、面白いと思えば面白いけど、面倒だし、手間もかかるし、何の効果もない。でも、そういうものが媒介になると面白いのです。芸術祭をやっていく面白さも同じような感じになっていると思います。ですから、アート作品を制作することだけでなく、人と人をつなぐメディエーターとかコーディネーターとかの部分が今後ますます重要になってくる。これから美術大学で学ぶ人が、実技もやりながら人の気持ちも理解し、なおかつ美術と普通の人をつなぐ存在として育てていくといいなと思っています。

北川フラム 教授

東京藝術大学卒。国内外の展覧会や芸術祭をプロデュースするアートディレクター、アートフロントギャラリー代表として活躍。「大地の芸術祭：越後妻有トリエンナーレ2000」でふるさとイベント大賞、東京ファッション大賞を受賞。長年の文化活動により、2003年フランス共和国政府より芸術文化勲章シュヴァリエを受勲。

特集 大地の芸術祭を終えて② 杉田敦教授出展作品 『critics coast -批評家の海岸』ディスカッション レポート



2009年9月5日、『大地の芸術祭-越後妻有トリエンナーレ2009』に出品した杉田敦教授のイベントの中で、大地の芸術祭の総合ディレクターを務める北川フラム教授と、東京都現代美術館チーフキュレーターの長谷川祐子氏と杉田教授によるディスカッションが行われました。杉田教授は『大地の芸術祭』に『critics coast -批評家の海岸』という作品を出品。浦田の空き家を利用した会場で、批評家・評論家・キュレーターの発言を集めた映像『ディクショナリ』を展示したほか、会期中の土曜日に、ゲストを招いて国際ディスカッションを開催しました。ここでは最終回に北川フラム教授と長谷川祐子氏を招いて行われたディスカッションの一部をご紹介します。

環境と作品の関係



杉田敦教授

杉田：今日はディスカッションの最終回ということもあって、「世界について」というちょっと壮大なテーマで、外に向けて話をしていけないだろうかと考えています。まず、長谷川さんは今日展示を回られて、印象はいかがでしたか。

長谷川：一つ目に感じたことは、この芸術祭は、1人のディレクターがすべてを決めていく形式ではなく、ホストとして場所と機会を提供することだけをおこない、アーティストの皆さんが与えられた場で非常に

自由に、伸びやかに、いろいろなプロジェクトをやっているということです。

二つ目は、一時的な作品と恒久的な作品とのバランスが取れているという印象がありました。「脱皮する家」とか、きちんとした形になって残る構造のものというのは、何年も継続して見るができる。ここに初めて来る人も、評価の高い作品はあらかじめ調べてきていて、非常に充実した鑑賞体験を味わっていました。

もう一つは、自然の力ということと、この場所との関係というものが、ここでは非常にリスペクトされるべきだと思うので、どちらかという、作品が1人で立っているというよりは、ここの環境と一緒にあるものの方が、印象に残って見えました。例えば、クロード・レヴェックの作品は、ベニスの作品よりはずっと良かったと思いますが、その後でみかんぐみの作品を見ると、ここで暮らすにはどうすればいいかということや、今の日本で古いもの、自分たちがある意味で不便に感じているものをどうやって快適にしていけるべきかについての未来への提案の手がかりのようなものが清々しく示されていて。おそらく、これを都市の中の例えば GA ギャラリーで見せられても、同じ印象は持たなかったと思うんですね。そういう意味で、ここの環境によってより良く私たちに未来を提示するものとして見える作品が私は印象に残りました。それと、作品の受付をされている方たちが皆さん生き生きとお仕事をされているので、それも良かったと思います。

杉田：ディレクションをされた北川さんは、今、長谷川さんがおっしゃったような意図があったのでしょうか。

北川：あまり意図はないのですが、うれしい評価をしていただいてありがとうございます。だいたい作家が勝手にやっているというのは全くその通りです。僕はディレクターとしてあまり意図的にものを考えているわけではなくて、むしろ意図的じゃない方がよいと考えているところがあります。意識していることがあるとすれば、美術は何でもありだと思っているので、みんながいろいろなことをやってくれるといいなというふうに思っていますね。

杉田：クロード・レヴェックの作品の話は、3回目のここでのディスカッションで話題になったのですが、その時は逆の感想が挙がっていました。北川さんは作家に自由に

やらせているとおっしゃいましたが、どうもここでやると、作家は土地の記憶であるとか、地域の記憶というものに引っ張られて、その家にあったものを使ったりしがちなのですが、レヴェックはそういうことがなくて、むしろ潔いのではないかという見方もあったんですが。

長谷川：展覧会というのは、各々の作品の良し悪しだけではないんです。記憶に残るかどうかなんです。例えば今日作品を10個見たとすると、その中で一番記憶に残って、自分の家まで戻ってノートに書いておきたいのはどれかということです。それには展覧会は作品本体だけじゃなくて、どういう状況でその作品と出会ったかというのが私は重要だと思っています。ですので、特にこういう環境性の強いところ、つまり、環境がニュートラルじゃない場所においては、その強さというものが大きく影響すると思います。レヴェックの作品は、もちろんベニスに出品していた地の底から響いてくる音の強さや光の効果はお金がかかった展示よりはるかに良かった。それでもなおレヴェックの持ち味であった例えばフランスの地下室でやったときのようすごいものとは、違っていた。展覧会に携わる人間としていつも考えているのは、どういう場所でどう見せて、お客さんに出会ってもらって、それを自分の記憶に落とし込んで、自分のものとして持って帰ってもらえるのか、です。私は今回みかんぐみの作品の方を「持って帰れる」わけです。でもそれはあくまで私自身の経験の中で比べてみた時



クロード・レヴェックの作品「静寂あるいは喧騒の中で」

に、そういう印象を持ったということです。

作品の傾向は偏るか

杉田：北川さんは先ほど全く意図していないとおっしゃいましたが、ここに出品している作家は、ここに来て、この環境や文化に触れると、それについての理解を深め、地元の人たちとコミュニケーションして、地元の人たちの記憶や文化を大切にす気持が自然に出てくると思うのですが、でもなにか、ある種それが一つのブームのようになってしまっていないですか。

北川：作品の展示場所に関していうと、1回目は大反対の中でやったので、道路・公園、そういったパブリックな場所ではかほとんどできませんでした。だから、世間一般にあるパブリックアートのオブジェが割と多かった。2回目になって、集落が参加したいと言うようになってきて、集落の中、つまり行政が持っていない土地の中で展開できるようになりました。2回目が終わってから、中越大地震があって、これは大きな転機になりました。芸術祭云々ではなく、みんなで地元の手伝いをやりはじめた。常駐している連中が御用聞きとして家々を回り始めて、足りないものとか欲しいものを聞いたり、家を少し壊したり直したり、掃除をしたり。ひたすら住民の話を聞いたり。そうやって、2006年には、かなり集落の中に入っていけるような状態になった。ここで家に入っていくと、家の記憶が圧倒的になってくる。とにかく80年、120年の歴史があるものもたくさん出てくる。それまではニュートラルな中でやってきたのに対して、そういう環境の中で、生活とか時間というものの感覚が噴出してくるのは当たり前だろうと思うんですね。だからそういう作品が多くなるのはしょうがないことですね。

だけれども、おそらく2012年はまた変



長谷川祐子氏

わります。美術というのは、ある種のものが多くなってくると、違うものが出てくる。今年特徴的なのは、吊りもの系というか、クモ系が多かったですね。次回は動物がかなり出てくるんじゃないかと勝手に思っているんです。やっぱり流行というか流れがあります。あとは、1回目、2回目、3回目と見て、今度はこういうのを出そうとか、作家がそれぞれに考えると思うんですね。

越後妻有での圧倒的な政治問題とは

杉田：この展示場所に来た人と話をしていると、そういう話をよく聞くんですね。今年は吊りものが流行りだねとか、地域の人とのコミュニケーションみたいなの成り立っている作品には飽きたとか。それにはアーティストは敏感に反応していて、それを肌で感じているアーティストはおのずと変わっていくと思うんですが。

最近、ポリティカル・コレクティブという意識が非常に高まっていて、アートを使ってもある種の政治的な問題だったり、社会的な問題に言及するべきだろうという意識が出てきているわけです。でも、今回300人以上のアーティストが集まっていますが、この中で社会的な問題を扱う人のパーセンテージが非常に低いと思うんですね。それは北川さんがおっしゃったように、やはり圧倒的な環境と、ここで苦勞して暮らしてきた方々の記憶というものが圧倒的な力を持っているからだと思います。その時に、アーティストが、日頃考えているような問題を、この場所でも言うということが必要な気がしているんですが。

北川：そういう作家がいてもいいし、それはそれでありがたいと思うのですが。ただ、ここでの圧倒的な政治的・社会的問題というのは、地方を切り捨てている現実ですよ。それ以外に決定的な社会問題というのはここにはないんです。それに対応していくというのは当たりの話で。だから、切り捨てられている現実に対して、「本当にこの地域がいいんだ」という、地域に対するポジティブな表現でこの落差を明らかにするということは十分に政治的・社会的であるわけです。クロード・レヴェックに関していうと、要するに私たちにお金がかかった。それでも相応の建物を決めてここでやろうと思ってくれた点において、ものすごくいいなと、よくやったなと思っています。お金がない、大変だということを知った上で、ベニスのフランス館でやるのとはわけが違うぞという覚悟を彼は持ったと思うんです。僕はそこが、彼は越



北川フラム教授

後妻有の現実に肉薄したと思っているわけです。

杉田：けれども、多くの都会に住んでいる方たちが、週に数回、あるいは何ヶ月か通ってきただけで、その文化に理解を示した態度を示すことが本当にいいことなのかどうなのか、僕にはまだちょっとわからないところがあるんですね。

北川：それはですね、私たちは都市にいて、世界経済や世界政治がやっていることをわかっているつもりになりがちだけれども、この越後妻有は、20年後には「そして誰もいなくなった」という状況になると考えられている。実際にそうなるでしょう。私たちは東京にいて「世界の政治が、経済が」と言うけれど、もっと現実的なことがここで起きていると僕は捉えているので、その現実を捉えた人たちのほうがよりの確でフレックスだと思っている。それがクロード・レヴェックのような表れ方をする場合もあるし、それをそのまま100%作品に反映させる人もいます。自分の中に違う形で入る場合もあるし。僕はそういうものだと思っています。

長谷川：美術館というものは、その場所に固定された、動かない植物のようなものですね。アーティストとそのアート作品はどんどん移動していく動物のようなものです。だから、まずそこに住んでいる方と、外から来る人たちをどういうふうに出会わせるかということが一番大切だと考えた時に、まずはそこに住んでいる人を一番大事にするということが重要だと考えました。

大都市でおこなわれるビエンナーレ・トリエンナーレといった国際展というのは、世界で今起こっているさまざまな差異というものを見せていくために、いろいろな作品を見せるというミッションがあると思います。さまざまな差異を知ってもらうことが、都市で起こっている現実を相対化していく、より鑑賞者が自分自身のリアルに深



くコミットしていく一つの方法でもあるわけです。それに対して、こういうマージナルな、都市ではない場所で行われる展覧会は、この場所で開催するなどの、大都市のビエンナーレ・トリエンナーレとは異なるミッションがあるわけです。北川さんはたぶん敢えて明確にはおっしゃらないと思うんですが、それは、まずこの里山に住んでいらっしゃる方たちの意識や生活を、活性化していくということと、多くの人たちに出会わせることだと思うんです。

北川さんは先ほど、アートというのは差異というものを価値とする唯一のものだとおっしゃいましたが、それがやっぱり北川さんの考えの基本にあると思うんですね。だから、差異をもたらすことによって、この人たちに何か新しい政治的な提案をするという話ではないんです。ただそばにいる。ただあなたに会う。ただ一緒にご飯を食べ話す。そのための機会としてアートがあるということで私はいいと思います。そのプラスアルファとして、いろいろな新しいオブジェができていたり、プロジェクトが残っていたりする。それがまた新しい人と呼んでいく、その装置だと考えればいいと思います。

都会人の「情けなさぶり」を吐露する

杉田：大切なのは、その地域の人たちをアクティベートすることだというのはまさにそうだと思うのですが、ただし、そのために何かおもねることはしたくないと思ったんです。ミッションが「アクティベートする」っていうことだけであれば、コンセプトに関してはある種のルールというのは生まれてこないはずなんです。に

もかかわらず、とても不思議だなと思ったのは、例えばここで300何人が出品している、都会を懐かしむ作品がない。本当にそうなのかって思うんです。単にそれは、本当にここが素晴らしいからなのかもしれないんだけど、何かそういった柔らかいルールみたいなものができているのだとしたら、それこそ僕にとっては危険な感じがして。そうだと良くないなと思ったんです。

なにも壮大な問題をここで扱えと言ってあるわけではなくて、ここの場所こそ都会人は自分自身の都会での情けなさぶりを見せるべきだと思っていて。例えば、僕らはここにやってくると、草木一本からして知らないことだらけです。その知らなさぶりというのをここで吐露するような作品があってもいい。だから僕は敢えて、頭でっかちな、この地域で受け入れられるわけがない作品を出展したんです。



杉田教授出展作品「ディクショナリ」

長谷川：それは北川さんがやっというしゃる一貫したアーティストックディレクションに対する一つの意見として非常に有効だと思います。

ディテールから世界に触れる

北川：ただ、僕もできるだけ違うものを選びたいとは思っています。僕ははっきり言って世界の美術家についてほとんど何も

知らないんです。たまたま周りにいる人たちを公募で選んでいるというだけ。国際美術展らしくしなきゃいけないという意識はところどころに出ますが、だからいろいろな人たちが加わってキュレーションしてくれるといいないつも思っています。ただね、僕らは世界を把握することはできないんです。ということの中に、めちゃめちゃ大きな誤差の範囲があるのですから、世界を把握した中でやるすき間と、狭い世界の中で組み立てていってやる杜撰さの中の範囲ってそんなにないと思っている。それは何が超えるかという、立ち居振る舞いが超える世界なんですね。ですから、僕は、ディテールなり狭い中からやっていることと、世界をつかもうとしてやることの中で、立ち居振る舞い、作風でどっちの立場からいっても同じだと思っているんです。杉田：2012年についてはどうお考えでしょうか。

北川：2012年のことは考えなきゃいけないと思っていますが、ただはっきり言って僕は、1年先のことはあまり考えていないし、考えられないんですね。どういう仕組みでやるかについても、本当にどうなるかわかりません。ただ、200の集落があって、自分のところでやってもらいたいという集落が増えてきて、それに対して頑張るというアーティストが増えてくれさえすれば、アナーキーな状態で結構行けると思っています。アーティストと集落のお見合いさえうまくやれば、それなりに頑張るって皆さんやるんじゃないかと。ただ、地元とのお付き合いという意味では、若手の日本の作家は地元とかなり丁寧にやれるけれど、外国のスーパースターたちはそんなに時間があるわけじゃない。そこがどう地域とつながっていくかという問題はずっとあります。だけど、基本的にはお見合いさえうまくいけば、かなり自立的にうまくいくのだと思っています。

杉田：このように長く続いている国際展はあまりないので、ぜひ続けてもらいたいと思っていて、より良くするために今日は敢えて思い付くネガティブなところをすべて言ってみました。話の内容は、越後妻有のことに終始しましたが、ひょっとしたら細部の出来事を見ていくことが、逆に世界について触れることになるんじゃないかという話が北川さんからありました。そういった意味で今日は世界について語ることができたのではないかと思います。どうもありがとうございました。

Lecture ● ① 客員教授 マーラ・セルベット氏特別講義 報告

イタリアを中心に建築やコンセプト・デザイン・エキシビションの分野で国際的に活躍するデザイナーであるマーラ・セルベット氏が本年度より本学の客員教授に就任されました。10月23日には特別講義が行われ、デザイン学科環境デザインコースの学生を中心に大勢の学生が聴講しました。その一部をご紹介します。



まず、私をご紹介くださった佐藤和子さん（本学同窓会長）に感謝申し上げます。日本におけるイタリアデザインの第一人者である佐藤さんは、私が最初に事務所を立ち上げてすぐの頃、まだ非常に若かった頃に、すでによく知られた日本人のデザイナーでいらっしやり、小さい事務所だった私たちのところを訪ね、非常に興味を持って私どものプロジェクトを見てくださり、私たちとしても誇りに感じたのを覚えています。

デザインにおける基本的な考え方

ヨーロッパでは、おそらくアジアやアメリカと比べて、プロジェクトのやり方が大変横断的です。すなわち、建築とかデザインというふうに分野を分けるのではなくて、建築家も一般的なデザイナーも、さまざまな分野の仕事をしています。ただし、いろいろな分野に同じ視点で取り組んでいます。

私は、アキレ・カスティリオーニ先生のもとでデザインを学びましたが、彼は、常に人間の構造を念頭にしてデザインされています。そのモノを使って人間が何をするのか、ということを念頭にデザインされているわけで、単に美しいモノを作るというのが目的ではありませんでした。私たちもその教訓を元に、「人間」を非常に重要な要素として常にプロジェクトに臨んでいます。私たちのプロジェクトは多岐に渡って、具体的に言うと、店舗から美術館、オフィス、スポーツ施設、見本市のスタンド、広場、ショールームなどがあります。単に美しさにこだわるのではなく、そこでの空

間、あるいは感覚的な達成というものを目指してデザインしています。まず人について考え、人に対して、相互作用する構造、つまり空間とか建築を設計する時には、それが人間の行動にどう影響を与えるのかということを考えます。人々とアクティブな形でインタラクションが取れるような建築を設計しています。

また、建築というのは、そこでの知識を共有するための施設であり、かつその場所に深く根ざしているという特徴を持っていないといけないと考えています。私たちはあらゆる場所で同じ成果を生み出そうとしているわけではなく、プロセスに対して関心を持っているので、その結果として何が出来上がるかを決めていきます。製品やブランド、ユーザーとの間で、あるいは、その組織の中でどういう感情が出るのかという部分にこだわっています。

「場所」と「コンセプト」から発想する

トリノの2006年度の冬季オリンピックのために都市のあちこちで展開したプロジェクト、「Look of the city」と呼んでいるものをご紹介します。このプロジェクトはコンセプトと場所という二つの側面から発想をしていきました。「場所」については常にどのプロジェクトでも考えています。まず、あらゆる冬季オリンピックの主催地が抱えるような普遍的な課題に対して私たちがどう考えるか。同時に、トリノという土地の固有の課題を考えました。トリノは建築学的にいろいろ特徴のある町ですので、その点も考慮しました。まず、高さです。高い建物が多いということと、周りが山々に囲まれているので、高い視点が常にあって、通りが必ず高いものに向かって作られています。そしてカラー。プロジェクトでは色彩的にも市の中心、その周辺部の建物、家などとマッチするカラーを選ぶ必要があります。それから産業。フィアットの工場がある場所ですので、文化的にも産業があるということも一つの特徴になっています。

次にコンセプトに関してですが、1つの概念に使ったのがマグネットプロダクション。磁石のように人を引き付ける地点を設けようという考え方です。都市計画において、まずもともと住んでいる住民たちの動きという層が考えられます。それからオリンピックを見に来る観客の人たちの動きもある。それから、スポーツの選手や、マス

コミの人などオリンピックの関係者の動きもあり、いくつか異なる層が重なるわけです。それらを考えて交差点、クロスするところを磁場の中心としていくつか設けて、そこからエネルギーをもらえる場所という位置付けを行いました。

カラーの決定の例

トリノのプロジェクトでデザインを手がけたものは非常に多岐に渡りますが、まず最初に、すべてのデザインに関して1色の色を使うことを決めました。イタリアの著名なグラフィックデザイナーと協力してデザインしました。都市自体も常に美しいので、それを強調していろいろな色を盛り込みすぎて、都市を隠すのではなく、むしろ都市とその美しさを際立たせたいということで1色だけを使うことにしました。ヴァーミリオン・レッド（朱赤色）、これはこここのクラマン村の方たちが使っていた色なのですが、これが1番この町に合うということで選びました。通常オリンピックというと、多様性を表現するために複数の色が使われます。多様性を表現するために、今回は色ではなくて、レタリングを複数使用しました。



トリノ冬季オリンピックでのプロジェクト

Mara Servetto マーラ・セルベット

1959年、イタリア・トリノ生まれ。国立トリノ工科大学建築学部卒業。ミラノに Migliore + Servetto 建築事務所を主宰。2006年、トリノ冬季オリンピック「Look of the City」で、イタリアのコンパッソ・ドーロ賞を受賞。2010年のショパン生誕100年を記念したポーランドのショパン博物館国際コンペの優勝者となり、オープンを目指して目下建設中。

Topics ● ① 洋画4年生が地域を巻き込んだイベント開催 旧工場でファッション&パフォーマンスショー

8月22日、芸術学部絵画学科洋画専攻4年の前川加奈さんと前野里佳さんが群馬県みどり市の旧桑原マンガン工場でファッション&パフォーマンスショーを開催しました。1年生の頃からパフォーマンス集団「JOY」をつくって活動をしていたという2人は今年はじめて「ワタラセアートプロジェクト(WAP)2009」夏展に参加。今回のショーはその一環として、地元の旧工場や空き店舗・空き家などの中から2人が特に魅せられた旧マンガン工場を会場に開催しました。モデルとなったのは小2から50代までの男女17人。地元の人たちとともにショーを作り上げることを目指した2人は、モデルとスタッフをわたらせ深谷鐵道沿線から、年齢や性別、体形、経験などを不問で募集し、モデルとの対話を通じてその人の個性を生かした衣装をつくり上げました。衣装づくりだけでなく、演出や舞台

装置の制作も行った2人は、その制作過程も公開しました。

また、このショーがきっかけで地元の関係者から話を持ちかけられ、11月1日には桐生市の青柳のこざり屋根工場でも「ハロウィーン」をテーマに地元の4歳から59歳のモデルたちを登場させたショーを開催しました。これからも地域の人たちを巻き込んだイベントづくりをしていきたいと話す2人の今後の活躍にご期待ください。



青柳のこざり屋根工場でのショーの様子



旧マンガン工場でのショーの様子



あいさつをする2人

Topics ● ② LEVI'S×短期大学部テキスタイルデザイン学生有志 ～デニムをつかったアートプロジェクト～



12月2日～12月7日、短期大学部造形学科デザインコース テキスタイルデザインの学生有志が、六本木ヒルズ森タワー52階のテラスで、ユーズドのデニムを使った公開作品制作をしました。このプロジェクトはリーバイ・ストラウス ジャパンの企画する LEVI'S FOREVER BLUE キャンペーンの一環で、同社が顧客から回収したデニムを使って作品を制作するアートプロジェクトです。六本木ヒルズ森タワー52階テラスを11月21日～12月7日

の間「LIVE ART @ STUDIO BLUE」という名で工房として設え、その中で制作風景をパフォーマンスとして来場者に公開しながら制作を行いました。

作品のコンセプト「結」は、このプロジェクトに携った短期大学部非常勤講師の牛尾卓巳先生によるものです。「大量のジーンズを使って、ジーンズをジーンズという形や観念から解き放ってやろうと思ったんです。裂いて完全な紐状にすることによって、一本の紐という素材の形に戻してやる。それを再構築して新たな意味のあるものにしてやろうと。再構築する方法としては「結ぶ」という方法でつないでいこうと思った。「結ぶ」というのは一番単純な方法だけれど、それだけに力強さがあります。手の仕事の力強さがあるし、ヴィジュアル的にも「結び目」がいっぱいあるところが面白い。「人と人を結ぶ」「縁を結ぶ」、そういった「人

と人とのつながり」という意味もあって、FOREVER BLUEのコンセプトとリンクしています。」

参加した小川菜摘さんは、「学校の中で作品をつくるのではなくて、「リーバイス」という大きな会社と学生の私たちが関わり合いながら、お客さんがたくさん来るこのような会場での制作はとても魅力的」と話してくれました。また、山下美梨さんは、「制作風景を公開することで、「人と人をつなぐ」というコンセプトの通り、一般のお客さんと一緒にひとつの作品を完成できたらおもしろい」と、制作への意気込みを語ってくれました。

完成した作品は、12月8日～12月25日の間、公開制作の会場となった六本木ヒルズ森タワー52階ギャラリースペースの壁面に展示されました。



短期大学部非常勤講師 牛尾卓巳先生



公開制作



展示の様子

アート・デザイン表現学科 連続トークイベント

「心と心をつなぐ4つの物語」前編

2010年4月、杉並キャンパスに開講する、芸術学部アート・デザイン表現学科の誕生を記念し、プレイベントとして2009年11月28日より4週連続でトークイベントを開催。新学科を構成する「メディア表現」「ヒーリング表現」「ファッションテキスタイル表現」「アートプロデュース表現」の領域ごとに、各界で活躍するゲストをお招きし、興味深いお話をいただきました。今号では、1週目、2週目のイベントの様子をお伝えします。



11月28日 **明和電機 土佐信道さん**

メディア表現の地平から「究極のユーモア、愛、そして涙」



企業を模したアートユニット、明和電機。アーティストである、明和電機の代表取締役社長の土佐信道さんに、自身の作品によるパフォーマンスを交えながら、これまでの歩みや独特の表現手法を語っていただきました。土佐さんのユーモアあふれる語りにより会場は笑いに包まれ、和やかなイベントとなりました。

アートをプロダクトにするのが明和電機

先日発売した音符型の電子楽器『オタマトーン』をはじめ、明和電機はさまざまなプロダクトを作ってきました。でも、明和電機というのは芸術家、つまりアーティストです。電気屋じゃないんですよ（笑）。

一般的に芸術家とは、たとえば絵描きであればタブロー、つまり完成された1枚の絵を売って収入を得る商売です。“ひとつだけ作る”、これがアートなんですよ。明和電機がほかの芸術家と異なるのは、アートをプロダクトにしていく点です。では、こうしたスタイルをとっているのはなぜか。今日はそのきっかけを中心にお話しします。

明和電機とは、徹底的な会社ごっこ

僕は大学時代から機械を使ったアートを作りはじめました。家業が電気屋だったので自然な流れだったんです。そもそも明和

電機とは父が興した会社で、電気部品を製造していました。僕が小学校のときに倒産……“父さん”の会社が“倒産”しちゃったんですけどね（笑）。

その後、僕が明和電機としての活動をスタートさせたのは大学院からです。修了制作の作品を発表するとき、どうしたら見る人の興味を引けるかと考えてひらめいたのが、父の明和電機。機械なのだから、電気屋のスタイルで発表してはどうかと。それで兄の正道に「一緒にやる？」と連絡を取ったら、「やるやる」と。余談ですが、この兄が変わった人で。ときどき行方不明になることがあり、「土佐家のハレー彗星」と呼ばれていました。誘ったときもなぜか雪山でバイトしていたらしくて、で、そんな兄と応募したソニー・ミュージックエンタテインメントが開催した芸術家のオーディションでグランプリをいただき、1993年にデビューしました。

それからいろんなプロダクトを発表したり、ライブをしたりと今のスタイルになりました。明和電機とは、一言でいえば徹底的な会社ごっこなんです。ところが兄が2000年に退職しまして。ハレー彗星が再び飛び立ったわけです。50%の人員削減で、今は僕が社長で唯一の正社員です（笑）。



明和電機の最新作『オタマトーン』。人間が声を出す仕組みが元となっている楽器。

作品を完成させたその先にあるもの

もう一つ、明和電機が特殊なのは、自分で自分の作品のプレゼンをすること。普通の芸術家なら画廊にゆだねる部分です。僕にとって“もの作り”は前半戦。そしてそれをプレゼンし、ぶっちゃけ買ってもらうのが後半戦です。この後半戦がないとお金が入らず、次のサイクルに入れません。

ここで重要なのが、人に思いを伝えるテクニックです。絵を描くこともテクニックがいりますが、僕の場合、おもちゃメーカーさんやスタッフ、大勢の方に協力してもらって作品を発表しています。実現するには言葉で伝えるだけじゃなく、たくさんのスケッチを見せたりして自分の中にあるイメージを共有する必要があるのです。

芸術家としてやっていくのは、簡単なことではないかもしれません。時に、お金がなくなりもします。でも、「お金の貧乏と心の貧乏は違う」。これは母の言葉です。父の会社が倒産したので家は裕福ではありませんでしたが、母は好きなことをやらせてくれました。母が心を豊かにするきっかけをくれたから、今の僕があります。お金の貧乏さと、ものを作ったり、考えたりする心の貧乏さは違って、すべて工夫次第。作りたいものがあるなら、作り続けてください。そうすれば、運やタイミングは向こうからやってくるはずですよ。

土佐信道さん（明和電機、アーティスト）

1967年生まれ。筑波大学芸術研究科修士課程在籍中の1993年、明和電機を結成。魚をモチーフにした『魚器 (NAKI)』シリーズ、電動楽器『ツクバ (TSUKUBA)』シリーズ、『エーデルワイス』シリーズなど、アートの概念を超えた作品を次々に発表。アートをプロダクトに落とし込む独自のスタイルで世界的に活躍している。

12月5日

ねもといさむさん 関康子さん

ヒーリング表現の地平から「子どもの遊びとおもちゃの話」

絵を描いたり、演奏したり。“遊び”によって人は進歩してきました。今回のゲストは、プレイワーク代表、おもちゃデザイナーのねもといさむさんと、トライプラス代表、エディターの関 康子さん。子どもとおもちゃを切り口に、遊びとヒーリングの関係などをお話いただきました。



おもちゃデザイナー ねもといさむさん

子どもの造形／エネルギーとキネーシス

私は杉並校舎からほど近い阿佐ヶ谷で、子どもの創造アトリエの運営とおもちゃのデザインをする「プレイワーク」という事務所を開いています。子どもの造形活動とおもちゃ遊びは、「モノ（画材・素材、おもちゃ）を介して子どもが世界を知り、世界を表現する」という共通性があります。

子どもの造形活動の意味・価値を座標で説明します。X軸左側を「キネーシス（目的を達成するための行為）」、右側を「エネルギー（行為そのものが目的）」、Y軸の上部を精神の開放感や高揚感を感じる「発散」、下部を緊張感を持って制作する「集中」とします。エネルギーは、粘土をこねて形の変化や感触を楽しんだり、絵の具を混ぜて色の変化を楽しむ造形あそびと、その価値を表す概念。作品の完成度より課程を重視するので、作品の質や技術を求めるプレッシャーから解放されます。とくに



「エネルギー×発散」の領域は、触覚・視覚・聴覚など五感で楽しむ行為によりヒーリング効果があると思います。「キネーシス×集中」の領域では、達成感を得、創造力を育むことができます。

おもちゃのデザインについて

例えば、積み木。各年齢の子どもの手のサイズや誤飲を防ぐ安全基準などから、積み木の最良の基本寸法を“4cm”と導きだしました。この4cmをもとに、半分の2cm、倍の8cmを組み合わせてデザインしています。また、積み木ならぬ「積紙」（つみがみ）を発案しました。帯状の色紙を切ったり折ったり丸めたものを積み重ね、美しい形を追求し、楽しむものです。

私の創作は“機能創造タイプ”が中心で、素材の魅力や動きからヒントを得たり、偶然発見したことを掘り下げながら創ります。

そういえば、そもそも“よいおもちゃ”とは何でしょう。私はつぎの6つの条件、①遊びの機能が発揮される ②色、形、素材などモノとして魅力的 ③安全で清潔 ④耐久性・普遍性 ⑤おもちゃそのものが創造的 ⑥倫理性 を満たしていることだと思います。

本日見ていただいたのは、私の活動のほんの一部ですが、今これら30年間の実践を“Nemoto method”としてまとめているところです。女子美の演習の授業では、学生の皆さんにこれを伝えながら、一人ひとりの創造力を引き出すことに力を注ぎたいと思います。

遊び × ヒーリングのつながりと広がり



エディター 関 康子さん

みなさん、こんにちは。私は編集・企画に長く携わってきましたので、現場で遊びとおもちゃに追求することはねもとさんにお任せし、ここでは“子ども”と“遊び”がどのような場で広がっているのかについて

お伝えしたいと思います。

まず、遊びと娯楽って何が違うのでしょうか？遊び＝Playは、能動的に自ら参加していくこと。娯楽＝Entertainmentは、TVやゲームなど与えられたプログラムに受動的に参加することかなと思うんです。つまり、遊びは自己表現をすることでもあり、表現できると開放感やすっきり感を味わえる。それって癒しの効果＝ヒーリングですよ。河合隼雄さんが用いた箱庭療法もアートセラピーのひとつですし、医療施設や福祉施設でも、遊びがもたらす癒し、喜び、楽しみなどの効果に着目しています。それから、「スヌーズレン」というのはオランダ発祥の活動と理念なのですが、障害を持つ人に光や音、匂い、振動などを組み合わせることで感覚を刺激するトータルリラクゼーションの空間であり実践です。このように、遊びには深い意味があるのだなということが理解できますよね。

そしてヒーリング以外にも、遊びの可能性は広がっています。たとえば「冒険遊び場」。森の中でターザンごっこをしたり、七輪でおやつをつくってみたり。危ないからといって禁止や規制をするのではなく、遊び場の状況に応じて対応できるプレーワーカーと一緒に、子どもの“やってみたい気持ち”を実現するための場所なんですよ。もともとは、コペンハーゲンの廃材置き場で生き生きとする子どもたちに着目して生まれた発想で、日本にも世田谷区の「羽根木プレーパーク」などがあります。

遊びやおもちゃとヒーリングの関係って、まだ理論としては固まっていない領域だと思うんです。ですので、女子美では脳科学者と共同で勉強したり、遊びの可能性を考えていけたらいいなと思っています。

ねもといさむさん（おもちゃデザイナー）

1952年生まれ。玩具デザインと子どもの創造アトリエを運営するプレイワーク代表。コンテンポラリー・トイ・オブ・ジ・イヤーを2年連続受賞、世界・木のクラフト展で大賞受賞。2012年度から非常勤講師として、ヒーリング表現領域3年次実技科目「子どもの道具デザイン演習」を担当予定。

関 康子さん（エディター）

トライプラス代表取締役。女子美術短期大学卒業生。1981年株式会社アクシスに入社し、1991年から1996年までデザイン雑誌『AXIS』編集長を務める。その後、フリーランスを経て現職。2011年度から非常勤講師として、ヒーリング表現領域2年次講義科目「子どもの福祉デザイン概論」を担当予定。

NEWS ● ① 文部科学省「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム」に採択

平成21年度「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム」(GP: Good Practice)に、本学短期大学部の取り組みが採択されました。GP: Good Practice事業は、文部科学省が平成15年度から始めた事業で、大学や短大で取り組まれている意欲的な教育活動(大学教育の改善に資する優れた取り組み)を公募・採択し、資金を重点配分するものです。

取組名称「障害理解とアートフィールド参画支援の取組
…学生達が支援する新しいアートのミッション」

事業推進責任者: 短大部長 小川 正明

副責任者: GP担当調査役 木下 道子

本取り組みでは、学生がアートを通し障害者と一緒に活動することにより、障害の困難さを体験的に学習し、障害への共感的理解と障害者の社会進出に関するニーズ把握、社会での障壁や課題の統合力を備えた、サステナブル人材として、持続的社会的実現を目指すことを目標としています。障害理解を前提として、障害者がアーティストとして優れた作品を元に、アートフィールドに参画できるよう支援するプログラムです。学生たちが障害者の作品作りや展示な

どを支援する他に、小中学校や地域で住民と障害者がアートを通して触れ合い、支え合うノーマライゼーションへの取り組みでもあります。また、障害者自身がアートの力による障害の治療効果に気づき、さらには自らの生き甲斐に繋がるアフォーダンス(可能性)を拓げる試みとなります。卒業後も学生たちは理念の担い手として、障害理解を基に障害者と共生するサステナブル社会の実現を目指し継続した活動を展開します。



講演会風景—障害をのり越えて絵と向かい合う一人の画家—



障害者アート展に協力—相模原キャンパスの巡回展風景—

NEWS ● ② オーストリア ウィーン応用芸術大学と学術交流協定締結

2009年10月23日付で大学と短期大学部はオーストリアのウィーン応用芸術大学(Universität für angewandte Kunst



協定調印の様子

Wien, University of Applied Arts Vienna、以下アンゲバンテ)との間で学術交流協定を締結しました。この協定では、学生・教職員・研究者・学術情報資料の相互交流、共同研究、国際会議への参加支援などの活動が行われます。本学学生の間ではオーストリアは留学希望国上位にランクされる魅力溢れる国であり、アンゲバンテ学生の間では日本留学に高い人気があります。2010年度から本学学生の派遣と先方学生の受入れを開始し、学生交流を中心とした活動を展開していきます。また、同大学は欧州屈指の収蔵品を誇るオーストリア応用美術博物館の付属学校であったため、隣接する同美術館と本学美術館との作品交流や展覧会交流も期待されます。

アンゲバンテは1867年に創立されました。作品『接吻』で著名な画家グスタフ・クリムトが卒業した学校として世界に知ら

れ、ヨーロッパを代表する美術・デザイン系大学としてその地位を確立しています。学生数は1800名で、教育研究領域は建築、絵画、版画、彫刻、写真、陶、舞台デザイン、ファッションデザイン、グラフィックデザイン、広告デザイン、ランドスケープデザイン、産業デザイン、領域横断型メディアアート、デジタルアート、保存修復と多岐にわたります。(国際センター)



NEWS ● ③ 2010年度入学者より一級建築士受験資格が認められます



2010年度に新設されるデザイン・工芸学科環境デザイン専攻の入学者に対し、一級建築士の受験資格が認められます。認定指定科目単位を取得し、卒業後の実務経験3年で受験が可能です。

デザイン・工芸学科環境デザイン専攻では、美大生としての感性を生かしてクリエイターを目指す学生のための授業と、建築

士などの資格取得を目指す学生のための授業が開設されます。学生一人ひとりが志望に合わせてカリキュラムを自由に計画し、環境デザインの専門性を高めることができ、他美大や工学系大学にはない、自由度が魅力です。

Topics ● 3 インテリアトレンドショー第28回JAPANTEX2009 「クリエイターズタウン」に出展

11月11日～13日、東京ビッグサイトにて、インテリア業界を代表する企業が世界から集う国際産業見本市 JAPANTEX が開催されました。

この中で行われる恒例の「クリエイターズタウン」は、国内外あわせて29校でテキスタイルを専攻する学生たちが、企業や団体から提供された3つの素材＜デニムの耳・織物の耳・五箇山和紙＞から、立体・半立体の作品を制作し、プレゼンテーションするものです。今年のテーマは「俯瞰と仰視」でした。本学からは、芸術学部工芸学科、短期大学部専攻科造形専攻工芸デザインコースが参加しました。

【芸術学部工芸学科】

【蠢】

コンセプト

テーマから「時の流れ」を連想し、地層が形成されていくイメージを織物で表現しました。大地を俯瞰したとき、そこに形成されている地層を想像し、視点を変え、仰視することから歴史を感じることができると考えました。観る人に地層の形成をイメージしてほしいと思い、その様子をうごめきながら互いに引き寄せられていく形と、何層ものテキスチャーの疎密で、凹凸のあるテキスチャーと力強い赤により、躍動感や生命力を表現しました。



【短期大学部専攻科造形専攻工芸デザインコース】

【軸】

コンセプト

「俯瞰と仰視」から、両極端でありながら人々の心に大きな希望を宿す大切な要素であるということを見いだしました。下を向けば大地があり、上を向けば広大な空がある。間に存在するのは私たちで、人は常に空を凝視し大きな大地を俯瞰することを願ってきました。その願いは、気球、飛行機、そしてロケットと形を変え、その範囲は次第に広がっていきました。その様子を「軸」と捉え、その表現のために、一丸となって取り組みました。



Topics ● 4 東京デザイナーズウィーク2009に参加

10月30日～11月3日、明治神宮外苑にて、東京デザイナーズウィークが開催されました。このイベントは、1000を越える企業・学校・大使館・デザイナー・ショップ等が参加し、最新のデザインを紹介する国際的なデザインイベントです。今年は、環境に対してデザインができるこ

とをコンセプトに「LOVE GREEN」をテーマに行われ、学生作品展でのテーマは「GREEN LIFE」。生活の最も身近に存在する住空間から環境を考える GREEN デザインプロジェクトということで、33校39グループの国内外の学校が参加し、約500点が出品されました。

本学からも、芸術学部デザイン学科プロダクトデザインコース、芸術学部メディアアート学科の学生が参加し、作品展示が行われた屋外の各ブースには常に来場者が訪問し、学生と話している様子が多く見られました。来場者は6万人を超え、大変な賑わいをみせていました。



女子美術大学(A)ブース



「水花」メディアアート学科 菅谷友里



「Neccowork」デザイン学科 藤原光子

Topics ● 5 高山村でワインぶどう仕込み体験

長野県高山村の須高ケーブルテレビ株式会社と本学は2006年4月よりアートやデザインを生かした地域づくりを連携して行っています。

今回の産学官連携地域文化創生事業の高山村訪問は、芸術学部メディアアート学科の1年生38名、2年生2名、3年生15名、4年生6名が参加し、9月21日には、ワインぶどうの収穫、仕込みをおこないました。

ワインぶどうは村内にある角藤農園で栽培しているシャルドネを約2時間かけ、2トン近く収穫しました。その後、近郊の飯網町にあるワイナリー「サンクゼール」に移動し、昔ながらの様式で仕込みを行いま

した。フランスの伝統衣装を参考に作った手作りの衣装を着て、ギターの演奏とコーラスに合わせて足踏みでぶどうの果汁を搾りました。

今回仕込みを行ったワインぶどうは3月末には仕上がり、学生がデザインしたラベルを貼ったボトルにつめて販売される予定です。そのうち110本を「女子美110周年記念ワイン」として、学内および卒業生などを対象に、販売を計画しています。

(メディアアート学科)



手作りの衣装を着てぶどう踏み

NEWS ● 4 100周年記念大村文子基金

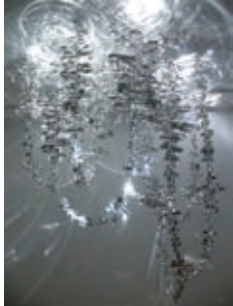
創立100周年記念事業の一環として、「100周年記念大村文子基金」は、平成11年に大村智理事長夫妻からの寄付を基に、文子令夫人のお名前をいただいて設立されました。この基金によって運営されている「女子美パリ賞」(第11回)、「女子美ミラノ賞」(第3回、4回)、「女子美制作・研究奨励賞」(第9回)、「女子美美術奨励賞(留学生対象)」(第8回)、そして本基金の目的のために功績のあった者、および団体に贈られる「大村特別賞」が以下の方たちに授与されました。

■平成22年度 女子美パリ賞

[パリ国際芸術都市のアトリエ利用権 / 副賞 100万円]

田口 一枝

平成 7年3月 短期大学造形学科美術コース卒業
平成 9年3月 芸術学部絵画科洋画専攻卒業



上:「Eloquent Silence」/2009
下:「Llum d'onada (Light Wave)」/2007

■平成21年度 女子美ミラノ賞

[ミラノの本学借り上げマンションの貸与 / 副賞 各20万円]

結城 友香梨

芸術学部ファッション造形学科 3年次在籍



「image of wasser」
オパール加工、シルクスクリーン、トランスファープリント
/2009

園田 紗希

芸術学部絵画学科洋画専攻 3年次在籍



「カク」S50号 / 油彩画 / 2009

■平成22年度 女子美ミラノ賞

[ミラノの本学借り上げマンションの貸与 / 副賞 100万円]

野村 仁美

平成19年3月 芸術学部ファッション造形学科卒業



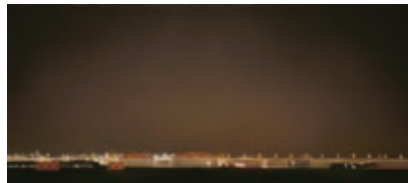
「wear a human」/2005

■平成21年度 女子美制作・研究奨励賞

[副賞 各20万円]

牛嶋 直子

平成18年3月 芸術学部絵画科日本画専攻卒業
平成20年3月 美術研究科修士課程美術専攻修了



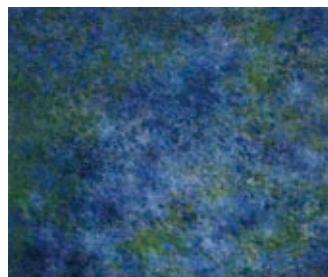
「the other side(08-01)」130×58 cm
パネル、炭酸カルシウム、顔料、樹脂 / 2008



安 美子
平成 21年3月 美術研究科
博士後期課程美術専攻修了
「SeiSei-JakuJaku 070501」
182.5×92.0×9.5cm
墨汁、綿布 / 2007

川田 祐子

昭和63年 芸術学部芸術学科造形学専攻卒業



「A THOUSAND WINDS」194×162cm
アクリル、キャンバス / 2006-7

■平成21年度 女子美美術奨励賞

(留学生対象)

[副賞 各10万円]

Jasarevic Taida

美術研究科博士後期課程美術専攻版画研究領域 3年次在籍
国籍 ポスニア



「Big Blue2」60×82cm / 凹版 フォトグラビュール、
アクワチント、エッチング / 2009

李 賢熙

芸術学部メディアアート学科 3年次在籍
国籍 韓国



「Flight」150×50cm / コンピュータグラフィック

蔡 知垠

短期大学造形学科デザインコース 2年次在籍
国籍 韓国



プライベートミュージアム

■平成21年度 大村特別賞 [副賞 記念品]

・「2009アジア・パラアート TOKYO」
女子美支援チーム

展覧会名 「2009アジア・パラアート TOKYO」
会期 平成21年9月11日～16日
(そごう・西武 西武池袋本店開催)

・「Grandfather's Letters展」
高大連携プロジェクトチーム

展覧会名 「Grandfather's Letters展」
会期 平成21年7月22日～8月31日
(代官山ヒルサイドテラス開催)

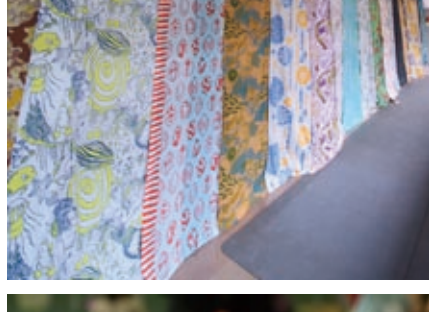
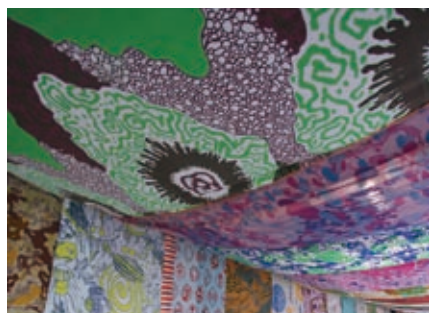
Festival ●●● 女子美祭2009

10月23日～25日の3日間、杉並・相模原の両キャンパスで女子美祭が開催されました。今年のテーマは、杉並が「COLOR」、相模原が「ギミック」でした。

杉並のゲストには漫画家の今敏さん、相模原のゲストにはNHK教育テレビ『つくってあそぼ』わくわくさんでおなじみ久

保田雅人さん、本学卒業のアートディレクター吉田ユニさん、イラストレーター100% ORANGE / 及川賢治さん・竹内繭子さん、イラストレーター中村佑介さんを迎え、連日大盛況のうちに幕を降ろしました。

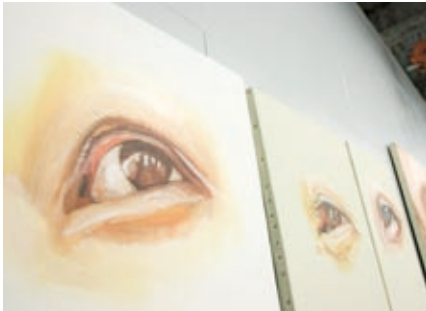
杉並キャンパス



Festival

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

相模原キャンパス



Lecture ● 3 デザイン学科 客員教授 仲條正義先生 特別授業



学生の前でお話される仲條先生

10月17日、1011教室にて仲條正義先生の特別授業が行われました。授業参加者はデザイン学科の学生22名で、他に聴講のみの参加者が20名ほどいました。授業参加者にはあらかじめ課題が出されており、その完成作品を仲條先生が中心となって同学科教授の奥村毅正先生、准教授の林規章先生、立花文穂先生、能見英子先生らが一点ずつ講評するものでした。

課題は「ドクロをモチーフに16頁のページものをつくる」というものでした。イラスト、写真、コラージュなど表現自由。文字要素の有無、サイズ、装丁・綴じ方自由という条件があげられました。また課題発表とともに、2009年1月にクリエイションギャラリー G8で開催された、「仲條服部八丁目心中」の際に仲條先生が制作されたドクロをモチーフにしたポスターを寄贈していただき、学生へ作品への取り組みを促していただきました。

講評会には学生が想いおもいに表現したドクロの冊子が並び、ページをじゃばら状

にした人、土の中から掘り起こして読む冊子を作った人、ドクロの物語を紙芝居にした人など独創的な作品が並びました。仲條先生からは一人ひとりの作品に対してこのページのここはいいね、写真の撮り方を工夫したらいいね、ここをもっと整理すると良くなるね、など具体的な指針をいただきました。

講評の中で先生は今回の作品を、「こういう作品はこれから先つくろうと思ってもつけれないから、大事にするといい。昔の日記を後から見返すように、あとで見るといいものだよ。みんなこの一回でやめないでつっこんでほしい。」とおっしゃっていました。また、手作業の偶然でできた色の美しさ、形の美しさを追求することの大切さについてもお話されており、パソコンで作品を作る傾向の多い学生たちに、手作業の大切さをお話される場面もありました。講評の最後には仲條先生からグランプリと入選を選んでいただき、学生たちにとって、とてもすばらしい体験となりました。



並べられた作品を見る先生方
左から林先生・仲條先生・奥村先生



ビジュアルデザインコース3年鈴木智香子さんの作品「あつこ」
ドクロはもともと自分のなかにある存在であるということ表現しました。妹の顔にペイントをしてイラストレーションをかざめました。
仲條先生のコメント:写真のバリエーションがいいね。(ページをめくりながら)この顔は怖い、この顔はかわいい。写真もいいね。



グランプリをとったビジュアルデザインコース3年の田中瑞菜さん。おめでとう！
私はもともとドクロが好きではなかったのですが、今年の春に祖父が亡くなり、骨になった祖父をみて、ドクロをきれいになることは祖父もきれいになってしまおうような気がして、ドクロの明るいイメージを作って好きになりたいと思い、作品にしました。
仲條先生のコメント:本当にかわいいし、色もきれいだ。ドクロがきれいとは思えないな。おじいさんも喜ぶんじゃないかな。

Topics ● 6 ochibasXon the earth project コラボレーション企画 開催



落ち葉を使ってナスカの地上絵のような巨大絵を描くプロジェクト ochibas。ダンボールハウスをつくり、その中で様々なイベントを体験してもらった on the earth project。11月1日に行われたイベントはこの2つのプロジェクトが協力して、新たな展開として開催されたものです。当日は双葉小の児童、保護者、女子美生らを含め参加者60名以上の大盛況でした。

ochibas は、教養ゼミ(担当: 杉田敦教授)を母体として2007年度に結成され、

今までハチドリやサルなどの巨大絵を作成してきました。一方、on the earth project (大学院 GP 認定プログラム) は、一昨年秋から昨年の夏にかけて、イベントや展覧会を企画し、地球について考えてもらう社会参加型のプロジェクトを実施してきました。

今回のテーマは「ハロウィン」。おぼけの絵を落ち葉で描き、その周りにダンボールで作った素敵なランタンを並べ、夜のライトアップを楽しみました。また、制作の合間に焼き芋を用意。焼きたての焼き芋をほおぼり、食べ終えるとすぐさま作業へ、遊びへと、児童もスタッフも、みんな熱心に取り組んでいました。みんなで協力し合い、一緒になってひとつのものを作り上げる達成感他何にも変えることはできません。地球の自然とアート的心。両者を結び企画

で、秋をおもいっきり満喫することができたのでした。



完成したおぼけの前で記念撮影



夜のライティング

協力: 神奈川県相模原市立双葉小学校
女子美術大学 大学院 GP プログラム
(<http://www.joshibi.net/outreach/gsgp/index.html>)
写真: 伊奈英次

Topics ● 7

シビル・ハイネン氏特別公開講座 「作品と制作プロジェクト/Work & Project」

11月5日、オランダの造形作家、シビル・ハイネン氏による特別講座「作品と制作プロジェクト」とワークショップが行われました。ハイネン氏はこの20年間、日本の主要な美術館や画廊で、布やゴム、牛革、金箔などの素材を使った立体作品や空間表現を発表し注目を浴びています。女子美生をはじめ、学外からも聴講者が集まりました。

レクチャーでは、代表作品と実験的な素材へのアプローチについてパワフルに語っていただきました。柔軟なテキスタイルを



ロールにして積み上げることで強靱で安定したものに大変容させた1992年テキスタイルコンペで優秀賞に輝いた「同じコインの表裏」。工業用ゴムシートに金銀箔を施すことで動く絵画のようにつくられた「シュピーゲル劇場のカーテン」。白い人口芝素材を床から天井へ流れるように使い、会場を一つの立体造形へと変貌させた京都国立近代美術館での個展など。人々が普段注目することのない素材への「探求と実験」の積み重ねが、制作の論理性とオリジナリティの元であることがわかりました。

ワークショップでは各自好きな布を選び、「裂く、巻く、解す、重ねる」などの動きかけをして、柔らかい素材が手の中でどのように変容していくかを考察しました。

「Looking, Feeling, Thinking, Respecting the Material - 観察、直感、探求、再認識」学生たちは無心で素材と向き合い、無言で集中することの大切さをあらためて実感。思いがけなく出来上がった

形やテクスチャーから、素材の魅力と自らの可能性を発見することができた有意義な時となりました。



ワークショップの様子

Topics ● 8

第7回「銀座スペースデザイン学生コンペティション」 Hatsuko Endo賞受賞

芸術学部デザイン学科ヴィジュアルデザインコースの島峰藍さんが、第7回「銀座スペースデザイン学生コンペティション」でHatsuko Endo賞を受賞しました。

「銀座スペースデザイン学生コンペティション」は、銀座の街にある、8箇所の対象ショーウィンドウの中からひとつを選び、その空間を模型とパネルで提案。銀座の人々や、関係者によって受賞者を決めるといふ、銀座アート・エクステンション・スクール主催のコンペティションです。

島峰藍さんは、銀座1丁目にあるハツコ

エンドウウェディングスのショーウィンドウを選び、今回のテーマである「ヨーロッパのエスプリ」を「フランスの精神」ととり、そこから作品名にもある「シャンパーニュ」という媒体で、ショーウィンドウの限られた空間を表現しました。淡い「シャンパーニュ」の雰囲気と品格あるウェディングドレスの共演は、商品はもちろん、ハツコエンドウウェディングスの精神をも魅力的に表現した作品となりました。

受賞作品は実際に10月24日～11月10日の間、ハツコエンドウウェディング

スのショーウィンドウで実現され、銀座の道を行き交う人々の目を楽しませました。



Topics ● 9

女子美スタイル☆最前線 JOSHIBI Degree Show 2009



「女子美スタイル☆最前線」が、昨年度に引き続き、BankART Studio NYKで開催されます。この展覧会は、大学院・大学・短期大学部、すべての学科・専攻・コースの卒業および修了年度学生作品の中から選抜された優秀作品の展覧会です。

日時：2月10日(水)～2月14日(日)

11:30～19:00 (入場：～18:30)

会場：BankART Studio NYK

横浜市中区海岸通3-9 (045-663-2812)

横浜みなとみらい線「馬車道駅」下車6出

口[万国橋口]徒歩4分

女子美への受験をお考えのみなさまへ

展覧会期間中、入学後の授業内容や入試内容、学生生活などについて、女子美の教員や進学アドバイザーが直接ご相談に応じるコーナーを設置します。お気軽にお立ち寄りください。

■お問い合わせ

女子美入試センター

TEL：042-778-6123

HP：http://www.joshibi.ac.jp/

International ● ● ● バーミンガム・アート・デザイン学院 海外サマー・スクール報告

学術交流協定大学であるバーミンガム・アート・デザイン学院（イギリス、以下BIAD）において、2009年8月1日から8月31日までの4週間にわたって海外サマー・スクールが実施されました。このスクールは、本学とBIADが共同で企画した美術・デザインの実技授業を中心に構成されており、今年で6回目となります。今回は30名（大学院修士課程3名、芸術学部16名、短期学部11名）の学生が参加しました。出発までに英国での生活オリエンテーションや事前指導、外国人講師による英語研修を約2ヶ月間にわたって受講し、スクール参加に備えました。

第1週目 自己紹介プロジェクト+服飾プロジェクト+ロンドン文化小旅行

自己紹介プロジェクトでは、まず、予め準備された種々の素材を使って「自分」を表現するツールをつくりました。そして教室の床や壁一面に貼られた真っ白い紙の上に各々のツールとインクで自由に「自分」を描き、現地教員や他の学生に向けて自己紹介をしました。

服飾プロジェクトでは、紙やワイヤーなどの素材を使って、服の概念にとらわれない「建築的な要素のある身につけるもの」をテーマに作品をつくりました。鳥のモチーフや妊婦のイメージの衣装など個性豊かな作品が完成しました。軽快な音楽に合わせてファッションショーで披露され、最後は専用スタジオで写真撮影を行いました。



服飾プロジェクト

週末のロンドン文化小旅行では、一日をかけて美術館や歴史的建造物を巡り、英国の歴史と現代を芸術という切り口から体感しました。

第2週目 トウキョウ・ロンドンプロジェクト+素材実験

ロンドン文化小旅行を元に、ロンドンと東京との相違点や類似点に着目しながら2大都市を表現する立体作品に挑みます。日本から持参した東京の写真、雑誌、新聞やロンドン滞在中に集めたチラシ類、地下鉄や美術館のチケットなどを使って、両都市をイメージさせるさまざまな作品が仕上がりました。その後、各都市が持つ全体構造を意識しながら大部屋に全員の作品を配置して「街」を完成させ、各自が作品プレゼンテーションをしました。



トウキョウ・ロンドンプロジェクト

素材実験は女子美での専攻以外で使われる素材や技法を経験し、その特性を習得できる絶好の機会です。木、石膏・粘土、テキスタイル、金属などの素材を扱い、新たな表現方法を発見しました。



素材実験(粘土)

第3週目 コミュニケーションプロジェクト+ヴェネチア・ビエンナーレ訪問

コミュニケーションプロジェクトでは、素材実験を基に、翌週に控えた修了制作で何に取り組むかを考えました。通常授業よりもきめ細かな個別指導の中で、先生との英語でのやりとりに苦労しつつも、作品のコンセプトとプロセスをじっくり見つめ直しました。

イタリアのヴェネチア・ビエンナーレ美術展訪問では、日本館のコミッショナーを務める南島宏教授(本学芸術学部芸術学科)から会場全体や日本を含めたお勧めのパビリオンの解説を受け、世界のアーティストの表現力や斬新さに魅せられました。



ヴェネチア・ビエンナーレ日本館

第4週目 ビデオブースプロジェクト+修了制作+修了式



ビデオブースプロジェクト

ビデオブースプロジェクトは、各自が「パーフェクト・ヒューマン」というテーマで1分間の映像作品を作る課題です。アニメーションや実写など、ユニークで完成度の高い30作品ができあがりました。

修了制作ではこれまでの授業や文化小旅行で体験してきたことを基に、集大成の作品を制作します。蠟づくりの鍋やメタリックなヴェネチアの運河など、海外サマー・スクールならではのユニークな作品が生まれ出され、ギャラリーに展示されました。

最終日は第1週目のファッションショーの映像とビデオブースプロジェクトの作品を全員で鑑賞し、修了式にて修了証書が一人ひとりに手渡されました。

(国際センター)



修了制作プレゼンテーション



修了証書を手に全員で

J A M ●●● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

JAM展覧会報告

平成21年度退職教員記念展

本年度定年退職する実技系の3名の教員による展覧会。稲田美乃里先生（絵画学科洋画専攻）、佐々木宏子先生（短期大学部造形学科美術コース）、仙石克己先生（芸術学科）の作品が展示され、ギャラリートークも盛況に終わりました。

（2009年9月16日～10月25日）



第31回造形さがみ風っ子展

相模原市内の小学校6校・中学校5校の子どもたちの作品が展示され、にぎやかな会場となりました。

（2009年10月28日～11月1日）

ロビー展示

第4回File?展

表現者にとって「ファイル」とは如何なるものか、その関係性をあらためて問うことをテーマとした、洋画研究室主催による全女子美生対象の公募展。今年で4回目となり、毎秋恒例の展覧会として定着してきた感があります。今回は歴代の受賞作品もあわせて展示されましたが、熱心に見る学生たちの姿が印象的でした。

（2009年9月30日～10月12日）



銀座gallery女子美 展覧会報告

Des funéailles 保科晶子展

第9回女子美パリ賞受賞者・保科晶子による展覧会

（2009年9月28日～10月17日）

2009アジア・パラアートTOKYO

才能ある作家たちの優れた作品が、障害をこえ、国境をこえて一堂に出会う国際絵画展。障害者アートの素晴らしさを多くの方々に紹介することができました。

（2009年10月15日～25日）

※関連記事 p11 をご参照ください。

第2回バラでできたものたち展

旧古河庭園内大谷美術館で開催された「第2回バラでできたものたち展」の報告展示。バラを原材料に色材・造形素材を作り出し、一部もしくは全体にそれを使った平面作品や衣服などが展示されました。

（2009年11月13日～11月24日）



特色GP「問題解決型美術大学教育の実践」2007～2009活動報告展

平成19年度「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択され、本学が取り組んでいる「問題解決型美術大学教育の実践」の教育プログラムの報告展示。学生がプログラムで制作した作品や、活動の映像を紹介しました。

（2009年11月30日～12月6日）

JAM展覧会予告

平成21年度女子美術大学大学院修了制作作品展

平成21年度に大学院美術研究科を修了する学生の修了制作を約50点展示します。

（2010年3月9日～3月20日）

女子美ガレリアニケ展覧会報告

女子美ガレリアニケとは、若手女性作家を中心に、女性をテーマとして作家や作品などを取り上げるだけでなく、教員をはじめ芸術学部・短期大学部、同窓生から公募した企画を中心に、展覧会、パフォーマンス、ワークショップ、トークショーなどを開催しています。

五 葛西絵里香展

葛西絵里香（短期大学部造形学科専攻卒業）のゴム版画による作品を展示

企画：伊藤雅敏（短期大学部造形学科デザインコース教授）

（2009年9月15日～10月3日）

isotopy satoko kaneko

兼子紗都子（短期大学部造形学科デザインコース卒業）の展覧会

企画：杉田敦（芸術学部基礎教養系教授）

（2009年10月9日～10月17日）

はたけばたけ satoe akimoto

秋元理恵（短期大学部専攻科修了）の展覧会

企画：杉田敦（芸術学部基礎教養系教授）

（2009年10月23日～10月31日）

NNNNYのデザイン家電の予習復習

伊藤ガビン、いすたえこ、ハギー Kこと萩原慶によるデザインチーム「NNNNY」の展覧会

企画：伊勢克也（短期大学部造形学科デザインコース教授）

（2009年11月5日～11月20日）

女子美アート・セミナーサテライト講座 銅版画・リトグラフコース作品展

銅版画・リトグラフコース平成21年度受講生による作品を展示。

企画：田中一幸（オープンカレッジセンター長）（2009年11月25日～12月5日）

「暖」2009 小野養豚ん展

小野養豚ん（芸術学部絵画科洋画専攻卒業）による立体・ドローイング作品を展示。

企画：伊勢克也（短期大学部造形学科デザインコース教授）

（2009年12月9日～12月25日）

アート・デザイン表現学科イベント

1. 女子美術大学 ヒーリング・アートプロジェクト 制作の記録展

1992年から本学が取り組むヒーリングアートによる医療・福祉施設的环境改善のプロジェクトを紹介。

（2009年10月23日～11月7日）

2. なかやみわ展

なかやみわ（2010年度よりアート・デザイン表現学科教員）による展覧会

（2009年11月11日～11月28日）

3. 栗又弥江子展

栗又弥江子（2010年度よりアート・デザイン表現学科教員）による展覧会

（2009年12月1日～12月13日）

4. ヤマザキミノリ作品展

ヤマザキミノリ（メディアアート学科教授）による展覧会

（2009年12月15日～12月25日）

Topics ● 10 公募展 受賞者紹介

昭和シェル石油株式会社 シェル美術賞2009

審査員奨励賞・本江邦夫審査員奨励賞
菅野 静香 (大学院修士課程美術専攻洋画研究領域2年)

ART MEETS ARCHITECTURE COMPETITION 2009 (AAC2009)

入選
小森谷 薫 (大学院修士課程美術専攻工芸研究領域2年)

国際瀧富士美術賞

グランプリ (滝理事長賞)・第30期奨学生
安藤 明佳 (芸術学部絵画学科日本画専攻4年)

第7回 銀座スペースデザイン学生コ ンペティション

ハツコエンドウ賞
島峰 藍 (芸術学部デザイン学科2年)

第45回 神奈川県美術展 【平面立体部門】

県立近代美術館賞
谷川 直子 (大学院修士課程美術専攻版画研究領域2年)

美術奨学会賞

北原 梨絵 (大学院修士課程美術専攻洋画研究領域1年)
入選

福島 さやか (大学院修士課程美術専攻立体芸術研究領域2年)

【工芸部門】

特選・入選

小森谷 薫 (大学院修士課程美術専攻工芸研究領域2年)
入選

松永 ちひろ (大学院修士課程美術専攻工芸研究領域2年)

宮崎 麻奈 (芸術学部工芸学科4年)

第34回全国大学版画展

美術館収蔵賞

小林 文香 (芸術学部絵画学科洋画専攻版画4年)

酒井 妙子 (芸術学部絵画学科洋画専攻版画4年)

谷川 直子 (大学院修士課程美術専攻版画研究領域2年)

吉田 ゆう (大学院修士課程美術専攻版画研究領域2年)

Topics ● 11 卒業制作展・修了制作展のご案内

学内卒業・修了制作展のお知らせ

●女子美術大学・女子美術大学短期大学部 卒業制作展
日時: 3月13日(土)~3月15日(月) 10:00~16:00
会場: 芸術学部: 相模原キャンパス
会場: 短期大学部: 杉並キャンパス

●女子美術大学大学院 修了制作作品展
日時: 3月9日(木)~3月20日(土)
10:00~17:00 (入場: ~16:30)
会場: 女子美術ミュージアム (相模原キャンパス内)
●芸術学部芸術学科卒業研究要旨発表会
日時: 1月19日(火)・20日(水) 10:00~
会場: 相模原キャンパス224教室

●芸術学部芸術学科 優秀卒業研究
および大学院修士論文発表会
日時: 3月14日(日) 13:00~
会場: 相模原キャンパス224教室

学外卒業・修了制作展のお知らせ

女子美スタイル☆最前線

JOSHIBI Degree Show 2009

日時: 2月10日(水)~2月14日(日)
11:30~19:00 (入場: ~18:30)

会場: BankART Studio NYK
神奈川県横浜市中区海岸通3-9 (045-663-2812)

平成21年度第33回東京五美術大学連合卒業・修了制作展
日時: 2月18日(木)~28日(日) (休館: 2月23日(火))
10:00~18:00 (入場: ~17:30)

会場: 国立新美術館 東京都港区六本木7-22-2
講演会「芸術の根拠—アウシュヴィッツ、以後」
講師: 南島 宏 (芸術学部芸術学科教授、美術評論家)
日時: 2月19日(金) 14:00~15:30
会場: 国立新美術館講堂

【大学院 美術研究科】

●美術専攻版画研究領域

「女子美術大学大学院学外修了制作展」
日時: 1月25日(月)~1月30日(土)
11:00~19:00 (最終日: ~17:00)

会場: 養清堂画廊
東京都中央区銀座5-5-15 (03-3571-1312)

●美術専攻工芸研究領域 (陶・織)

日時: 2月23日(火)~3月4日(木) 11:00~19:00
会場: GALLERY le bain
東京都港区西麻布3-16-28 (03-3479-3843)

【芸術学部】

●絵画学科洋画専攻 版画コース

「女子美術大学版画コース学外卒業展」
日時: 1月25日(月)~1月30日(土)
10:00~18:30 (最終日: ~17:00)

会場: 文房堂ギャラリー
東京都千代田区神田神保町1-21-1 (03-3294-7200)

●工芸学科 (染・織・ガラス・陶コース)

「女子美術大学芸術学部工芸学科卒業制作学外展」
日時: 2月20日(土)~2月28日(日)
11:30~19:00 (最終日: ~17:00)
会場: BankART Studio NYK
神奈川県横浜市中区海岸通3-9 (045-663-2812)

●デザイン学科 ヴィジュアルデザインコース

「POINT」
日時: 3月20日(土)~3月22日(月)
11:00~20:00 (最終日: ~17:00)

会場: ラフォーレミュージアム原宿
東京都渋谷区神宮前1-11-6
ラフォーレ原宿6F (03-6406-6378)

●デザイン学科 プロダクトデザインコース

「JOSHIBI PRODUCT DESIGN DEBUT WORKS
2009」
日時: 3月20日(土)~3月22日(月・祝)
11:00~18:00 (最終日: ~15:00)

会場: LA COLLEZIONE
東京都港区南青山6-1-3 (03-3407-7777)

●デザイン学科 環境デザインコース

「Environmental Design?」
日時: 1クール目 3月17日(火)~20日(木)
10:00~18:00 (初日: 14:00~)
2クール目 3月24日(火)~27日(木)
10:00~18:00 (最終日: ~17:00)

会場: タチカワ銀座スペース Atte
東京都中央区銀座8-8-15
タチカワ銀座ショールーム地下1階(03-3571-1373)

●メディアアート学科

「*~アスタリスク~」
日時: 3月3日(火)~3月8日(日)
11:00~22:00 (最終日: ~18:00)
会場: 横浜赤レンガ倉庫1号館2階
神奈川県横浜市市中区新港1-1-1 (045-211-1515)

●ファッション造形学科

「平成21年度女子美術大学
ファッション造形学科有志卒業制作展」
日時: 2月27日(土) 14:00~19:00
2月28日(日) 13:00~18:00
会場: SPEAK FOR SPACE
東京都渋谷区猿楽町2-2
SPEAK FOR B2F (03-5459-6378)

【短期大学部 造形学科】

●デザインコースクラフトデザイン系 陶芸・メタルデザイン

「陶芸・金工・漆芸 展」
日時: 2月14日(日)~2月20日(土)
11:00~19:00 (最終日: ~17:00)

会場: ギャラリー青羅
東京都中央区銀座3-10-19
美術家会館1F (03-3542-3473)

●デザインコースクラフトデザイン系 テキスタイルデザイン

「女子美術大学短期大学部
テキスタイルデザイン卒業制作学外展」

日時: 2月23日(火)~2月28日(日)
11:00~18:30 (最終日: ~16:00)
会場: 銀座アートホール
東京都中央区銀座8-110
高速道路ビル (銀座コリドー街) (03-3571-5170)

広報誌「女子美」の定期購読をご希望の方には毎号無料
でお送りしております。ご希望される場合は、お送り先
を広報入試課までご連絡ください。
また、広報入試課では女子美のニュースを募集していま
す。お気軽に下記までお知らせ下さい。
《広報入試課》 TEL. 042-778-6123
FAX. 042-778-6692
[E-mail] prs@venus.joshibi.jp

URL <http://www.joshibi.ac.jp>

発行 学校法人 女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 企画部 広報入試課
制作・印刷 株式会社 日相印刷
監修 山本 吉男
発行日 2010年1月9日